

章景追悼

武智鐵 二一

——なぜならおれは すこしぐらゐの
仕事ができて そいつに腰をかけてる
やうな そんな多數を一番いやにおも

ふのだ——宮澤賢治

私は章景と何のかゝはりもない。その舞臺の
印象すらさだかではないのだ。この十年ほど、
彼は私の前にあまり姿を見せなかつた。しかも
私に彼を悼む心の強いのはなぜだらうか。たゞ
かひ死んだ人は多い。私も親しい友をうしなつ
てゐる。だが私は歌舞伎を愛する。章景の未來
に俟つものが多かつた。世に青年の死ほど、い
たましいものはない。

章景の舞臺はおほどかであつた。ことに女形

として、女らしくないのが、父雀右衛門に似て、
好もしかつた。この二三年のあひだにものにな
れる人であつた。代役ではあつたけれど、菊五
郎をすら驚嘆させたすしやのお里に、その萌芽
が見られた。この快心の作が置土産であつたの
だ。名人らしい主觀の強さをもつた菊五郎のも
とで、彼は決して幸福ではなかつた。御曹子菊
之助を除いて、天才菊五郎のもとで、物になつ
た俳優はひとりも居ない。これは注目するに足
る現象だ。

廣太郎の書いた追悼文を読んで、魂が痛んだ。
章景と親しかつた人々の話も符合した。章景が
晩年にもつてゐた、時に噴出してはとめど的な

い、やんちやな仕科と、時にモラリストと呼ばれる従順な面と、この二つの奇妙な錯綜は、封建的な芝居道の、崩ほれかゝつてはゐるが、根強い桎梏と、ほんたうの生き方に生きようとする、若い時代のきびしい意欲——常識的なるものへの反撥と破壊——と、この二つの間の眞剣な戦場であつたのだ。(俳優としての大成への期待もこゝにかけられるのだ)彼の戦死は、この人間の悲愴な戦場での、名譽の、正しく名譽の、戦死でもあつたのだ。

章景とは、こんなにも立派な人なのだ。聲價さだまり、あまりにも安穩な生涯を終へた老若俳優には一頁を惜しむとも、影のやうに去つた章景のために、追悼の頁を重ねた所以である。

子役時代の章景



梅幸の千代に小太郎をつまめて
(寺小屋)